

二〇二三年令和五年、寅から卯へと干支も変わりました。

会員の皆様方には平素より大変お世話になっておりますし、多くのご理解も賜っておりますことに心より感謝申し上げます。

卯年とは、一つの物事が収まり次の物事への移行をしていくと言う時期であり、また「卯」のうさは「茂」と言う時期であり繁殖する、増えると言う段階にあたり、去年までで、様々な事の区切りがつき、次へと向かっていく、そこに成長や増殖といった明るい世界が広がっていくと言う年回りだそうです。



道
前橋積善会理事長 栗木信昌

因みに、六十年前の卯年には、キューピー三分間クッキングや日清焼きそばなどが世に出たらしいです。

守り本尊は、文殊菩薩で知恵や才能の仏様です。文殊菩薩様のご利益を頂きたいものです。

前橋積善会も文殊菩薩様の御仏力を賜り、益々成長していきたいと願います。

「コロナ禍」と言うようになつて、三年目を経ちま

した。窮屈な生活はまだ変わりませんが、そんな中での生活は段々と作られて来ている様に感じます。

ウィルスとの共存とは、絶えず感染リスクと対面していく事ですが、これは、人類がその歴史上ずっと戦つて来た経過でもあります。多分これからその事は変わらないでしょうし、我々はそんな中で乗り越えて今を迎えているのですから、未来に対しても樂觀的

で良いのだと思います。

人類の科学と精神の進化を期待したいところです。

さて、その歴史の中に積善会も身を置くわけですが、私の寺も開創が延徳元年一四八九年なので、はや五百三十四年経過しております。諸々の事情や諸問題を何とか乗り越えて、漸く今を迎えております。

特に、戦国時代は領主が次々と代わり、寺の存続も大変だった様です。

一五八一年に織田信長の四天王の一人の滝川一益公

が関東管領として厩橋に赴任された時は、短い期間でしたが、中央の空気や文化を関東の田舎に持ち込んだわけですから、当時の豪族や町民の方々は、突然の変化にかなり動揺された事と拝察いたします。長昌寺に於いても、滝川一益公は新築された長昌寺の庭に能舞台を整えて十二番の能を舞つたと記録されています。

一益公は観世流だったので、神の前で阿弥陀が舞う

と云う設定の流派にとつて長昌寺（当時長昌寺）は、本尊が阿弥陀三尊で松の字（神を意味する）が使われていたと言

う、まさに観世流には大変マッチした寺だった様です。しかも、曹洞宗に属していましたが、あまり有名ではありませんが、観世流の観阿弥や世阿弥は禅に深く傾倒して禅僧にもなつていて、曹洞宗の開祖道元禅師の七代目の弟子の了堂真覚は、観阿弥と同郷で深い繋がりがありましたし、世阿弥は、その弟子だった様です。世阿弥は、道元禅師の教えの『正法眼蔵』を経典として、道元禅師の禅

を濃密にそして親しく接し当時の先端的な精神文化の中心にいた様です。

禅は、教の教えをくむものです。釈尊はあらゆるものが法則によつて成立すると説きました。しかし、この法則を司る存在はなく、全ては条件の整うところ（縁）に成立するといました。これを縁起と言います。

現代社会は、多くの問題を抱え困難に満ちており、これを打開するには人間とその環境世界を正しく理解しなければならぬのです。が、現代の科学や哲学では、それに該当するものは、見当たりません。

しかし、仏教では最初からあらゆるものは不確実であり、客観などせず、これを打開してまいりました。道元禅師は、まるで科学者の様にこれらの問題を、縁起は全宇宙と我々を貫く法則で機関「はたらき」と表現し、「はたらき」を操作するものは無く、それはいつでも何処でも具体的に働いているものとなりました。あらゆるものは「はたらき」ですから、仏も我々も何ら区別はありません。仏は仏道を修する時に機能している「はたらき」で、怒りは怒りの時に機能して

いる「はたらき」なのです。

その時は、全宇宙が響き合っている一瞬だといえます。ですから、その時何をしていくかが最も重要な事となります。ですから、あらかじめ詮議された形式を導入する事、つまり道元禅師は坐禅を何よりも優先し、さらに坐禅を支える日常生活も坐禅であるといました。

世阿弥は、この様な道元禅師の禅を学び、研ぎ澄まされた新たな文化を創造したのでした。

そしてその芸術的資質を一挙に開花させ、観阿弥以来の伝統を受け継ぎながら、当時の先端的な仏教を身に付けたのでした。

時代を察知して自分の能力や感性に磨きをかけ、時代を変えていく事、それはどんな時代にも、それを導くための極めて有効な方法なのではないでしょうか。

多様でスピーディーな現代社会において、禅の考え方は、実は最も大切な根本精神なのかもしれません。鍛錬の中から造られる本質、この様な方法を『道』と言いますが、我々は、それぞれの立場の中に人道を得たいものです。